

利賀 フェスタ 93バル







TOGA FESTIVAL '93

世界は今急激に変わりつつあります。情報伝達システムや経済システムがボーダレスに機能し、人々は世界の各地で起こるあらゆる事柄を身近に感じ、同じ渦中を生きているような気分を味わうようになりました。あらゆる物事を、それが生起する現場に立ち会い、見、聞くという直接的な経験によって認識していた時代から較べれば、この変化は、人間が物事を理解する方法のこれまでの延長、拡大というよりは、全く新しい事態の到来といったほうがいいかもしれません。こうした急激な変化の中で、人間がより生産的な活動に従事するためには、変化に対応するルールやモラルを考え出さなければなりません。しかし、日本の社会がこの点における努力に立ち遅れているのはいなめない事実であって、ことに政治や芸術の面で、この事態——一般的には国際化といわれている現象——に対応できていないのは、多くの人々が指摘するとおりです。

演劇は、ギリシア以来2000年にもわたって、社会生活の中で重要な役割を占めてきました。演劇という文化的営為は、人間に対する理解を深めたり、人間関係を豊かにしたり、社会の状況をより良く改善していくためのパイオニアとしての力を発揮し、時代を先取りする人達の支持を得てきました。しかし、この力が今やほとんど発揮されていないのが現状です。繁栄する日本社会の中で、演劇活動は単なる商業活動か個人的な慰めとなり、ひとつの社会集団や共同体の精神の鏡となるような深さを欠落させてしまっています。むろんこれは日本の中にだけに見られる現象ではなく、多かれ少なかれ、経済的繁栄を基礎にして形成されてきた先進国といわれる国々に訪れている現象でもあります。あらゆる精神的価値基準が商品として個別に選別されるシステムの中で、演劇はその本来もっていた集団としての力を解体させられ、未来を予言し形成する能力を奪われてしまったのです。

共産主義国家が崩壊し、民族紛争が盛んになる一方で、資本制経済体制の矛盾が拡大する現在、私達は、今まで依拠してきた精神文化のシステムが、果たしてこれでよいのか、もう一度検証し直す時期にきているのではないのでしょうか。私達は、自分達が暗黙のうちに前提としてその活動を成立させてきたシステムが私達に何を与えてきたのか、何を与えてこなかったのかを検討する必要があるのではないのでしょうか。それは個々の地域の文化や伝統を問題にすることだけではなく、国境を越えて全世界的に機能し始めている商業主義のシステムとそれに随伴して成立している精神文化のシステムの検証を意味しています。

国際舞台芸術研究所が国際的な教育活動や共同作業にその活動の中心を置き、新しいルールやモラルの創造に従事するのも、こういう考え方に依拠しています。そしてそれはまた、日本の問題は世界の問題でもあり、世界の問題は日本の問題でもある、というより、そうあらしめなければならないという強い自覚にもよっているのです。

これまでもまして皆様方のご支援をお願いする次第です。

鈴木忠志



TOGA FESTIVAL '93

●世界の果てからこんにちはⅠ

構成・演出 鈴木 忠志
花火デザイン 武藤 輝彦
照明 吉沢 大志
入口 衛
渡辺 晃

音響
出演
老人 葛森 皓祐
シートン Leon Ingulsrud
召使 高橋 洋子
僧侶 中島 昭秀
竹森 陽一
坂戸 敏広
塩原 充知
錦部 高寿
加藤 雅治

車椅子の男
十川 稔
岩片健一郎
中山 一朗
泉 吾朗
川村 春樹
滋野 由之
新堀 清純
平塚 仁紀
三島 景太
貴島 豪
高橋 輝人
廣木 真琴

紅白幕の女
Kameron Steele
藤井 智美
相澤 明子
小野寺智子
米川理恵子
矢口 まみ
大森 菊代
久保庭尚子
中村 優子
見市 愛
田家 佳子
館野 百代
原田 実子

制作 斎藤 郁子 重政 良恵
鈴木 収 山川 和彦
大澤 厚 塩谷 亮
Bruce Turk

●世界の果てからこんにちはⅢ

構成・演出 鈴木 忠志
花火デザイン 武藤 輝彦
衣裳 鈴木 忠志
岡本 孝子
照明 Leon Ingulsrud
入口 衛
渡辺 晃

音響
出演
女 (ジュリエット) Ellen Lauren
付き添い 高橋 洋子

車椅子の男 (ロミオ)
中島 昭秀 竹森 陽一
加藤 雅治 坂戸 敏広
塩原 充知 錦部 高寿

ロミオの亡霊 Kameron Steele
看護婦 大森 菊代 久保庭尚子
米川理恵子 田家 佳子
館野 百代 原田 実子

●リア王

演出 鈴木 忠志
原作 William Shakespeare
訳 小田島雄志
音楽 Georg Friedrich Händel
Peter Tchaikovsky

衣裳 鈴木 忠志
岡本 孝子
照明 Leon Ingulsrud
音響 渡辺 晃
中村 優子

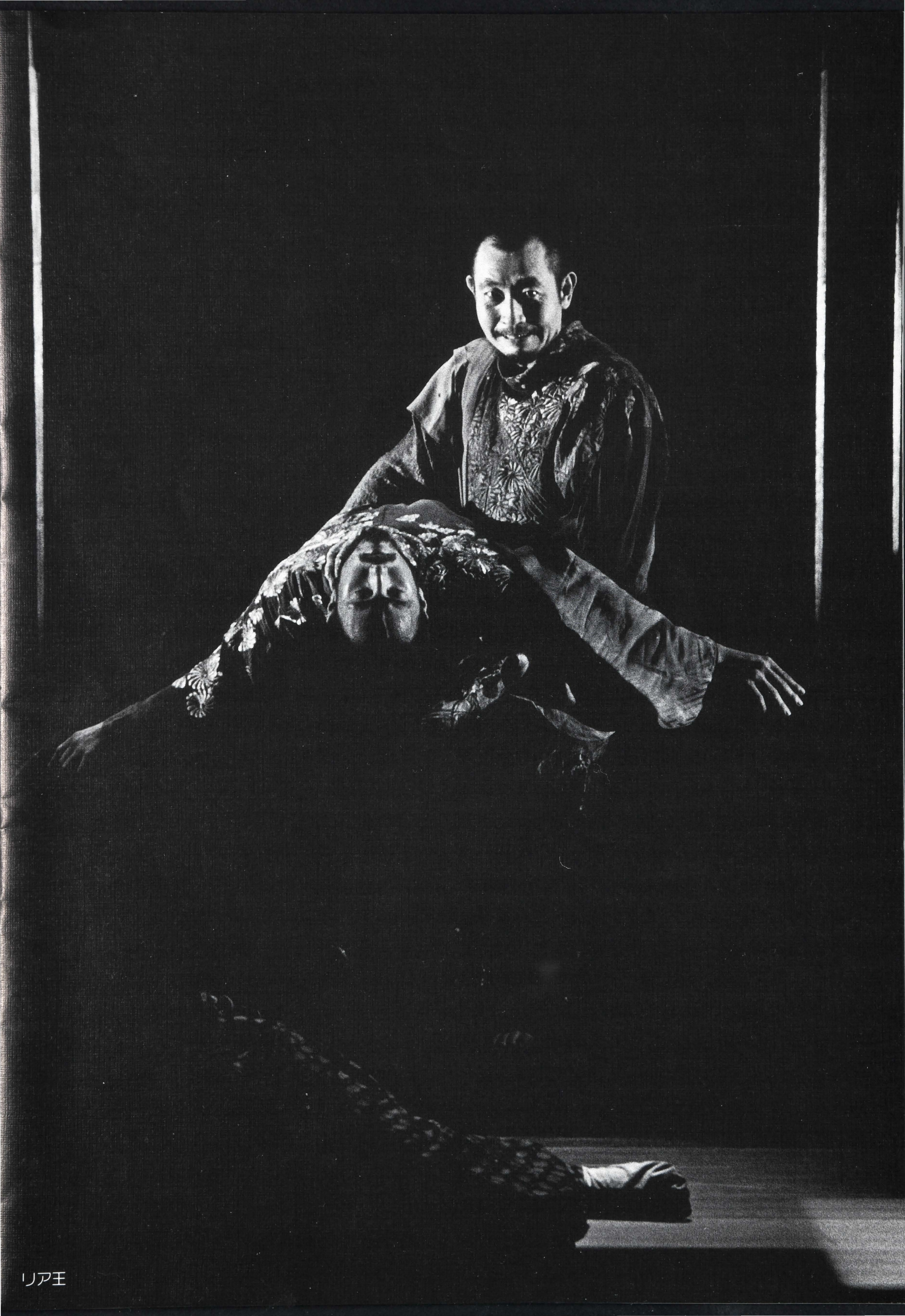
出演
リア王 笛田宇一郎
道化 (看護婦) 長谷川裕久
ゴネリル 中島 昭秀
リーガン 中山 一朗
コーディーリア 三島 景太
グロスター 葛森 皓祐
エドガー 加藤 雅治
エドモンド 錦部 高寿
オールバニ 塩原 充知
コーンウォール 坂戸 敏広
オズワルド 竹森 陽一
召使 滋野 由之
隊長 泉 吾朗
紳士 川村 春樹



Tadashi Suzuki

鈴木忠志

1939年生まれ。1966年に劇団 SCOT (旧早稲田小劇場) を創立。鈴木忠志構成・演出による『劇的なものをめぐってⅡ』(1970年初演)は演劇界のみならず、各界に衝撃を与えた。1974年、岩波ホールの芸術監督に就任。1976年に劇団の本拠地を富山県利賀村に移す。1982年、(財)国際舞台芸術研究所を設立し、日本で初めての世界演劇祭「利賀フェスティバル」を開催。1988年、三井フェスティバルの芸術監督に、1989年、水戸芸術館 ACM 劇場の芸術総監督に就任。その演劇論に基づく俳優訓練法スズキ・メソッドは、世界各国で学ばれており、鈴木自身もジュリアード音楽院、ウィスコンシン大学、カリフォルニア大学などで教える。代表作は、『トロイアの女』(1974)、『王妃クリテムネストラ』(1983)、『ザ・チェーホフ』(1987)、『リア王』(1988)、『ディオニュソス』(1990)、『イワーノフ』(1992) など。日本の現代演劇をリードするだけでなく、ヨーロッパ演劇の遺産であるギリシア悲劇、シェイクスピア、チェーホフなどの作品を素材として全く新しい視点からつくりあげられる舞台は、常に世界の演劇界から注視されている。





クリスチャン・プリゴー



エラ・ファトゥミ



エリック・ラムルー



TOGA FESTIVAL '93

●論争／再発

振付 Héra Fattoumi
Eric Lamoureux
音響 Christian Welter
制作 Emmanuel Serafini

出演 Eric Lamoureux
(論争)
Héra Fattoumi
(再発)



Héra Fattoumi, Eric Lamoureux

エラ・ファトゥミ
エリック・ラムルー

エラ・ファトゥミは1965年生まれ、エリック・ラムルーは1962年生まれ。1985年、ファトゥミ・ラムルー・カンパニーを創立。『3人のガレット』、『オシモの魔法I・II』などを発表。1988年から1989年にかけて、『HUSAIS』をもってヨーロッパ各地のフェスティバルに参加、パリ市ダンス・コンクールで入賞する。1990年には、同作品がバニョレ国際ダンス・コンクールで入賞し、注目を集める。1991年『サビス』(エクス・ダンスフェスティバル参加作品)、『パラレルな出会い』(ダンス現代劇場委嘱作品)、1992年『どんなに遠くに行こうと』(パリのバステューユ劇場で公演)、『お祭騒ぎ』(アヴィニオン・フェスティバル委嘱作品)と次々と新作を発表している。

●『Controverse(論争)』と『Récidive(再発)』

日刊新聞リベラシオンで、ファビアンヌ・アルヴェールは2つの作品についてこう言っている。「エリック・ラムルーの『Controverse(論争)』は、凝縮されたエネルギーに溢れ、おそらく不可視的な世界に起こる闘争の対立を描いている。ひとりの肉体のかすかに母性的で明瞭なイメージに彩られたその不可視的な世界で、肉体は薄明りに照らし出され、顎まで膝を屈げ、片方の腕をいっばいに伸ばし、全身をその無重力状態の白昼夢に集中させている。エラ・ファトゥミの『Récidive(再発)』は、あらゆる部分に対して頑固である。それほどまでに動きが簡潔で輪郭的であり、不安定で躍動的であり、しかもひどく慎重なのである。そして肉体に頻繁に加えられる圧迫感に屈するかのように髪を垂らす瞬間に、すべての動きがかき消され、爪先で立ち上がるときに上靴の締めつけから開放される。それがあのバランスへの誘惑なのである。この2人は彼らが舞台に存在することを踊っている」

一方はより内面的で集中が強度の世界を表現し、もう一方は、身体的な抵抗を介しつつ、ほとんど感受しがたいほどに微妙な世界を表現している、とすることができるだろう。そしてこの2つのソロはいずれも、夢と現実との個人的でデリケートな回路を描いているのである。

エマニュエル・セラフィニ

●『1917年の自画像』

まず最初に、ダンスにおける「エクリチュール」と「演劇性」という概念について、踊り手＝俳優としての私のなかに問題があった。より正確にいうと、どのようにすれば動きのエクリチュールからある演劇性へたどりつけるのかという問題である。

そこで次に、ウィーンの表現主義の画家エゴン・シーレ(1890～1918)について改めて考えてみた。とくに1917年の日付のあの「格子縞のシャツを着た」自画像についてである。そこで描かれた肉体のフォルムは極端に壊れている——まるで頭が今にも垂れ下がってくるかのように関節の外れた頸、角張った腕、異常に長く伸びた指、全体の構成の破綻によって際立ったリズム、そして明瞭に輪郭を浮び上がらせている線……。これらすべてがシーレの表現主義のオリジナリティーを形づくっている。そこに線と表現性とを結ぶ近道があった。そしてシーレのこの作品をもとに振付を構想すれば私の最初の問題に答えるいくつかの要素が見つけられると考えた。

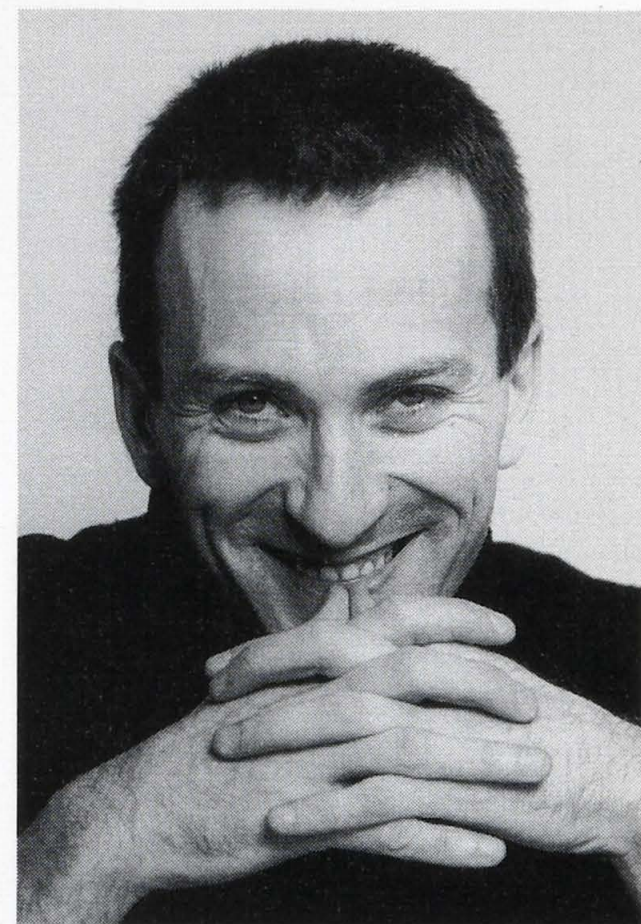
ソロ作品『1917年の自画像』は、したがってまず、肉体の彫刻と身振りの流体の歓喜のなかで語られるナルシズムのあらゆる要素を含んだ自画像の舞台である。

クリスチャン・ブリゴー

●1917年の自画像

振付 Christian Bourigault
音響 Francine Ferrer
照明 Sylvie Garot
装置 Dyssia Loubatière
Christian Bourigault
制作 Pascale Paulat

出演 Christian Bourigault



Christian Bourigault

クリスチャン・ブリゴー

1956年生まれ。大学で臨床心理学を学んだ後、精神科の医療機関に勤めるが、やがてダンスの世界に入る。1985年にモンペリエ国立振付センターの芸術監督であったドミニク・バグエと出会い、以後4年間共同作業をする。『リュシアン・クロール』、『天使の跳躍』など、ここでの一連の創作で、エクリチュールの厳密さと即興の楽しさを発見する。1989年、ステファニ・オーベンが主宰するポスト・スクリプトウムと契約。ここから振付に着手し、1990年初めてのソロ作品『1917年の自画像』を発表。同年、ダンス・カンパニー「ラランビック」を創立。1992年には、『愉快的黙示録』で、ヨーロッパのダンスの登龍門として有名なバニョレ国際ダンス・コンクールで受賞する。



TOGA FESTIVAL '93

●アヴァクム

構成・演出

Włodzimierz Staniewski

舞台美術 Włodzimierz Staniewski

Małgorzata Dzygałło

舞台監督 Ann-Karin Myklebostad

Stanisław Kral

制作 Jadwiga Rodowicz

出演

Anna Zubrzycka

Henryk Andruszko

Mariusz Gołaj

Tomasz Rodowicz

Wioletta Tomica

Catherine Corrigan

Stanisław Kral

Jarosław Tomica

バイオリン Susanna Pillhofer

Agata Babińska

コーラス Dorota Porowska

Mariana Sadowska

Jan Tabaka

Ilona Zgiet

Marek Andrzejewski

Ann-Karin Myklebostad

Paul Allain

●カルミナ・ブラーナ

構成・演出

Włodzimierz Staniewski

照明 Henryk Andruszko

舞台美術 Włodzimierz Staniewski

Teresa Targońska

舞台監督 Ann-Karin Myklebostad

Stanisław Kral

制作 Jadwiga Rodowicz

出演

年上のイゾルデ Anna Zubrzycka

若いイゾルデ Dorota Porowska

マルク王 Tomasz Rodowicz

マーリン Mariusz Gołaj

Jan Tabaka

ヴィヴィアン Catherine Corrigan

癲病者たち Stanisław Karl

Ann-Karin Myklebostad

バイオリニスト Agata Babińska

コーラスのリーダー

Mariana Sadowska

コーラス Wioletta Tomica

Jarosław Tomica

Ilona Zgiet

Marek Andrzejewski

Susanna Pillhofer

Paul Allain

●『アヴァクム』『カルミナ・ブラーナ』

『アヴァクム』は、戒厳令の施行時に、ポーランドで上演された。憎むべき政敵がいる絶望の底にあってでも、人間には命の歌が歌えることを証明せんがためである。

戒厳令の下、魂は目覚め、自由という奇蹟を求める叫びを上げた。奇蹟は成就した。政治と社会にはすばらしい自由が与えられた。

それではなぜ、私は芸術家として今岐路に立ち、「わが魂、わが魂、目覚めよ！」と叫ばねばならないのか。

芸術とは、個々の人間にとっての宗教である。

『アヴァクム』の稽古過程において、我々劇団員は全員で、ポーランド系ロシアの、そしてポーランド系ウクライナの地方の村々を転々とした。その地方に古くから住む老人たちの“集会”の風習にのっとり、共に歌ったり詩を朗唱したり、我々が稽古をしているいくつかの場面を観てもらったりした。村の人々と共にウォッカを飲みながら、いやしい生活の心貧しさを語り、彼らの歌に耳を傾けそれを学び、彼らの動きを見つめ、そして彼らと寝床を共にした。こうした生活体験によって、我々は自分達の演技を“自然なものにする”ことができた。

我々はよりよい世界について夢を共につむいだ。その世界は必ずしもこの地上にあるとはかぎらない。この地上でないとしたら、一体どこに？

答えはいつも同じだった。自分の心、自分の魂、自分の精神という地の上に。そしておそらくは、芸術という地の上に。

そう、その地をさまよいながら、我々は生命の芸術家として兄弟の契りを結んだのだ。

芝居の最後で歌われる歌は、次の言葉で要約できる。「すべての創造物は天の栄光を歌う」。

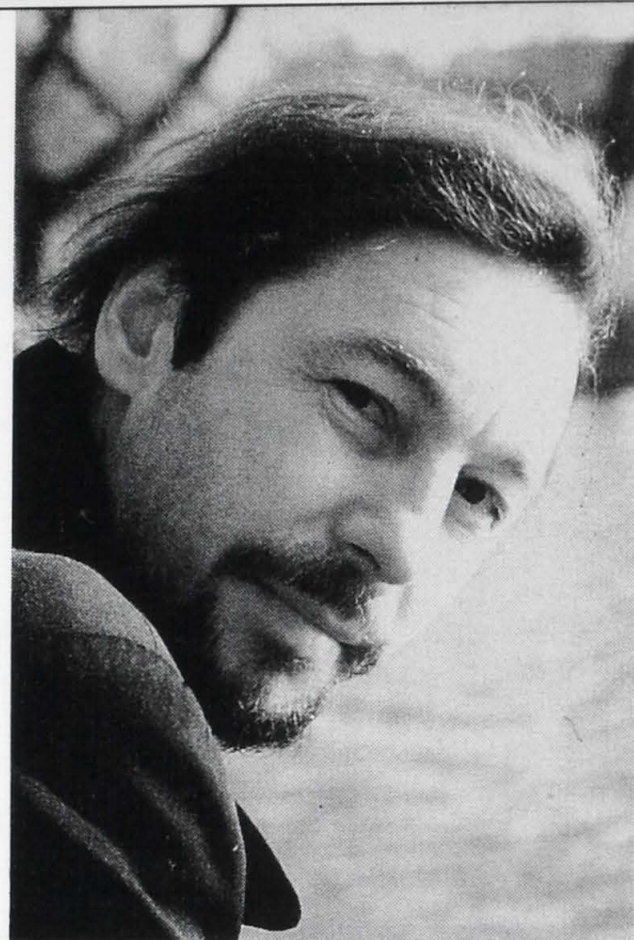
あらゆる人間に芸術の天才は宿っていると私は信じている。

『カルミナ・ブラーナ』のもともとのテキストは、12世紀と13世紀の詩のアンソロジーである。これは長い間アルプスの奥地の僧院に隠されたままになっていた。

12世紀と13世紀は、ヨーロッパ大陸全土が大きな変化をとげた時期である。それは、世界が新たに生まれ変わるという大いなる希望の時代であった。人間が知性と精神の力のかぎりを尽して、“愛”という概念を極めようとしたとすら思える時代である。愛の存在とその価値こそが文化と文明が存立するための唯一の条件であったとすら思える。

我々の舞台が語ろうとするのも“愛”についてである。

ヴォジミエシュ・スタニエフスキ



Włodzimierz Staniewski

ヴォジミエシュ・スタニエフスキ

1950年生まれ。1971年、グロトフスキーの演劇実験室に参加、台本の作り方など多くを学ぶ。1975年から東ポーランドで民俗学の調査を始める。1977年、ルブリンの近くの小さな村ガルジェニツェの廃屋となった教会を拠点に、村と同名の劇団を設立、宗教的にも人種的にも異種のものが混在するこの地域で、「素朴で自然のままの文化(Native Culture)」をインスピレーションの源とする演劇を追究する。ポーランドにとどまらず、ラップランド、メキシコ、韓国、アメリカなどでもフィールド・ワークを行い、さまざまな地域の伝統的な儀式、音楽、ダンスを取り入れた、独自のメソッドをつくりあげている。

ガルジェニツェは、1979年のナンシー演劇祭をはじめとして、アムステルダム、ニューヨーク、ソウルなどの演劇祭に招待をうけて参加する他、ポーランドでは、演劇と民俗文化をテーマにしたいくつかの国際シンポジウムを主催している。1991年には、ストラットフォードのロイヤル・シェイクスピア・カンパニーに招かれ、ワークショップを行なった。







TOGA FESTIVAL '93

●灰とバクテリア

構成・演出	平塚 仁紀 長谷川裕久
照明	入口 衛
音響	中村 優子
衣裳	丹羽 竹夏
出演	平塚 仁紀 中山 一朗 新堀 清純 泉 吾朗 滋野 由之 川村 春樹 三島 景太 岩片健一郎 吉沢 大志 塩谷 亮 高橋 輝人 貴島 豪 大澤 厚 廣木 真琴 Bruce Turk 藤井 智美 相澤 明子 小野寺智子 大森 菊代 久保庭尚子 見市 愛 米川理恵子 田家 佳子 館野 百代 原田 実子

●『灰とバクテリア』——“極左の演劇”について

無意味な瞬間、いつも無意味、それでも数には入る。数がそろって話は終わる。

ベケット『勝負の終わり』より

僕は常に“極左の演劇”を目指している。この“極左”とは何か、これは決して政治思想的な意味で言っているのではなく、あくまでも僕自身の演劇に対する独自の考え方に基づいている。僕は起承転結の明確なストーリーに裏打ちされたナチュラリズム演劇を、演劇の保守〈右〉と勝手に位置付けているので、僕のやろうとする、ストーリーを破壊し、ナンセンスなイメージで、ひどくバカバカしいことの中に、演劇の持つ無限の可能性を遊びながら探り出そうという企みは、当然のことながら保守とは正反対の革新であり、〈左〉に位置するのである。僕の表現について「あなたのやっていることはパフォーマンスですね」とよく言われるけれども、確かに真の意味でそうなのかもしれない、しかしこの国では原宿のホコ天で踊ればパフォーマンスだし、それこそ議員が国会で居眠りするのもパフォーマンスと呼ばれてしまう。とにかく曖昧なのだ。そういうもので僕のやろうとすることを括ってほしくない。僕は、僕自身の劇的イメージを先鋭的にビジュアル化することで、あくまでも演劇をやっているつもりだ。現在の演劇界、とくに僕と同じ20代の若い世代の演劇人は前衛を嫌い、わかりやすいストーリー重視の保守化傾向が強まっていると思うので、僕のような前衛を追い求め左へ左へと突っ走る姿勢は今の若い演劇人の中では希少にちがいない。ある舞踏家が言った。「私は地を這う前衛である」ならば僕は“疾走する前衛”になろう。僕が走り過ぎていく姿を確認できなくても、その後に巻き起る風に何かを感じてくれればそれで表現は成立するにちがいない。僕はただそれだけでいいと思っている。

今回の『灰とバクテリア』は、遙か彼方の未来の人類、とくに未来の日本人の姿についてのイメージをビジュアル化したつもりでいる。科学というものが飛躍的に進歩を遂げていく一方、人間の肉体はどんどん退化し、やがて単細胞化してしまう。人類は進化の過程を逆戻りして、結局は原始の姿に戻ってしまうのではないかというのが僕のイメージだ。人類が単細胞化した中でも、日本人はきっとバクテリアとなって、嫌われながらもしぶとく生き残るのではないかと思う。そして、それらのイメージに合せてバクテリア化した日本人の持つ灰色の記憶もビジュアル化したいと思っている。

平塚仁紀

A C M

鈴木忠志が芸術総監督を務める、自治体が初めてつくった演劇専用劇場、水戸芸術館 A C M 劇場。劇団 A C M はその専属劇団として、1990年のオープン以来、全国から注目を集めている。現在、全国各地より応募のあった200名余りの中から選ばれた25名の若い劇団員が、水戸を演劇活動の本拠地としながら、日々訓練と稽古に励んでいる。『ボンコツ車の墓場』(作：アラバール)、『三人姉妹』と『桜の園』(作：チェーホフ)、『ヘンリー四世』(作：ピランデルロ)、『事件——評決者たち』(構成・演出：長谷川裕久)などの舞台を次々と発表、中でも、今年1月に劇団 A C M の女優だけで上演された長谷川裕久作・演出の『さんせう太夫』は、スズキ・メソッドを受け継いだその力強い舞台づくりで演劇界の話題となった。

公共ホールのオープンが相次ぐ中、その運営方法が様々な形で模索されているが、A C M の専属劇団としての在り方は、90年代の日本の演劇を担うひとつの方向として期待を集めている。今回は、A C M 劇場を離れて、初めて野外劇場に挑戦する公演となる。



TOGA FESTIVAL '93

●サロメ

台本・演出 宮城 聡
 原作 Oscar Wilde
 照明 大迫 浩二
 美術 梶木 一郎
 舞台監督 堀内 真人
 小道具 佐伯真奈美
 衣裳 藤山 純子
 演出助手 吉田 桂子
 制作 福嶋 輝彦
 秋田 敬明
 中島さと美

出演
 サロメ 美 加 理
 宮城 聡
 ヘロデ王 阿部 一徳
 牧野 公昭
 ヘロディアス 明星真由美
 中野 真希
 ヨカナーン 渡辺 敬彦
 友貞 京子
 ナラボー 吉植莊一郎
 コロス 三宅 重信
 上々 有喬
 田辺 久弥

●ロゴスとパトスの乖離

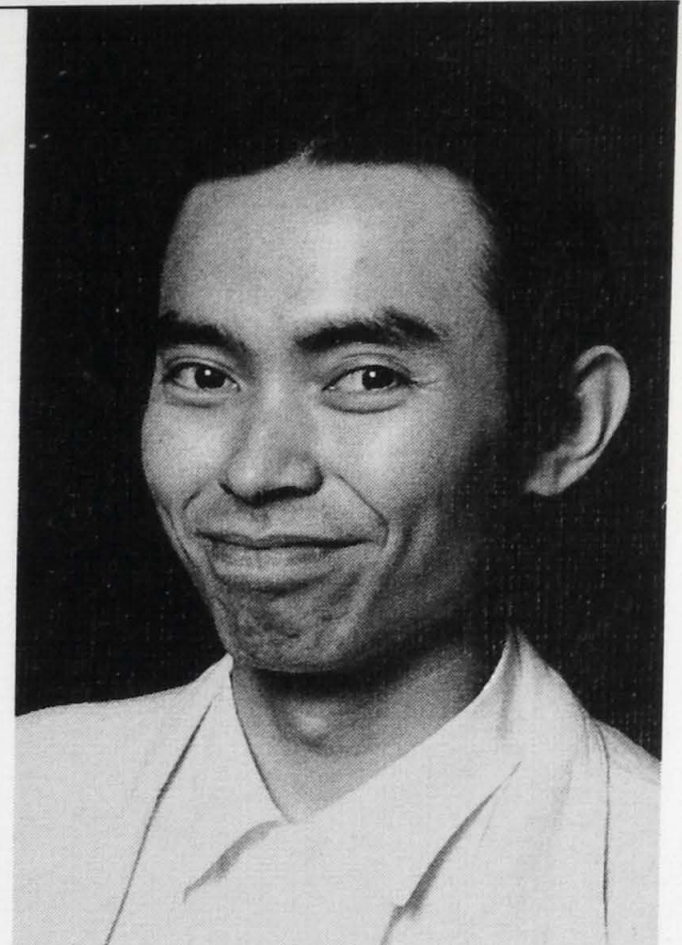
ダンスと音楽は本質的には全く同じもので、古来ダンスは必ず音楽を伴い、また音楽のある所には必ずダンスがありました。それは憂き世の現実から飛び立つための最も有効な手段であり、だからこそ人は常に音楽（とダンス）に憧れて生きています。僕らの中でも音楽とダンスに対するそういう憧れはとても強いのですが、それでもメインのフィールドを演劇に置いているのは、「言葉に縛られている」という現実の上でしか、僕らにとっての切実な芸術は作れないと感じるからなのです。かつて高橋悠治氏が『ことばをもって音をたちきれ』と喝破したように、今、20世紀の後半を生きている僕らにとって日々最も激しく直面している問題は、〈ロゴス〉と〈パトス〉、あるいは〈言葉〉と〈肉体〉、が引き裂かれていること、つまり自分がトータルに一つであるという実感がなく、あるシーン（例えば会社）での自分と別のシーン（例えば家庭）での自分が別の人間のように思えること、なのです。そういう「現実」を棚に上げて奏でられる音楽・踊られるダンスの「お気楽さ」に十分魅力を感じつつ、それでもその中に暫らく浸っていると、突然それを言葉で断ち切りたい衝動に駆られてしまいます。それは、「もっとギリギリのところに立ちたい!」という衝動です。「ギリギリのところに立つ」とは、結局自分が生きていることを強く感じたいということでしょう。

たとえばモーツァルトのような人にとっては、純粋に音の並び方を極めてゆくことが、彼自身の生にとって何より切実なことだったと思います。それは「お気楽な」音楽ではありません。「切れば血のするような」音楽です。そしてタダの人でしかない僕らにとっては、それだけ切実な表現は、「現実」の上に立つことでしか手に行うことができないと思うのです。

ここまで述べてきて、僕たちがク・ナウカで試みているスタイルがどうして生まれてきたか、の説明はだいたいできたでしょうか。〈肉体〉と〈言葉〉が乖離している、のが僕たちの「現実」だということです。どれほどパーパーと言葉を弄しても、僕の肉体はちっともそのことを語っていないことがほとんどです。そして肉体が語っていることは、今度はほとんど言葉になりません。だからこそ、はぐれてしまったその2つは、激しくお互いを求めあっているのです。

ク・ナウカ。はぐれてしまった言葉と肉体の間で交わされる、切実な求愛の行為。

宮城 聡



Satoshi Miyagi

宮城 聡

1959年生まれ。東京大学美学科中退。1986年『こんどの土日は〜迷宮生活』（原作：小林恭二）でソロ・パフォーマンス「ミヤギサトシショー」を開始。「確固たる語りの技術の上に舞踏的要素の加味された、新しい道化芸の誕生」と評価される。1988年『小説伝』（原作：小林恭二）でパルテノン多摩フェスティバル最優秀賞を受賞。その後、坂田明との共作『楽劇・菊燈台』（原作：渋澤龍彦）、『純愛伝』（原作：小林恭二）、『ノーライフキング』（原作：いとうせいこう）などを発表、また1992年からはオリジナル脚本・外部演出による新プロジェクト「スーパーミヤギサトシショー」として、『ホーキング博士のブラックホール生活』（作：荒俣宏、演出：磨赤児）、『蟹は横に歩く』（作：宮沢章夫、演出：平田オリザ）を上演、さらに現代の語りの世界を広げている。

一方、1990年に新カンパニー、ク・ナウカを発足させ、人形浄瑠璃から着想した、語る役者と動く役者の2人が一役を担う劇手法に挑戦、『ハムレット』、『サロメ』、『トゥーランドット』を構成・演出し、その方法論の行方が注目を集めている。







TOGA FESTIVAL '93

●ヨゼフとその兄弟たち／ フィオレンツァ

演出 Anatoli Vassiliev
作 Thomas Mann
舞台美術 Igor Popov
音楽監督 Galina Iourova
Andrei Kotov
Vladimir Tsirkov
舞台監督 Alexandre Nazarov
衣裳 Svetlana Zabavnikova
照明 Ivan Danichev

出演 Anna Allgulin
Larissa Belogurova
Larissa Borodina
Gouzel Chiriaeva
Boris Chnaider
Ludmila Drebnova
Evgeni Falin
Oxana Fandera
Dangoule Garnialene
Elke Heinbucher
Igor Iatsko
Natalia Koliakanova
Serguei Krasnoperets
Igor Lysov
Alexander Ogarev
Sergei Repetski
Ramil Sabitov
Nikolai Tchindiaikin
Victor Terelia
Larissa Tolmatcheva
Rassa Tornaou
Maria Zaikova

制作協力 Jouri Krestinsky

●「演劇についての公開授業」より

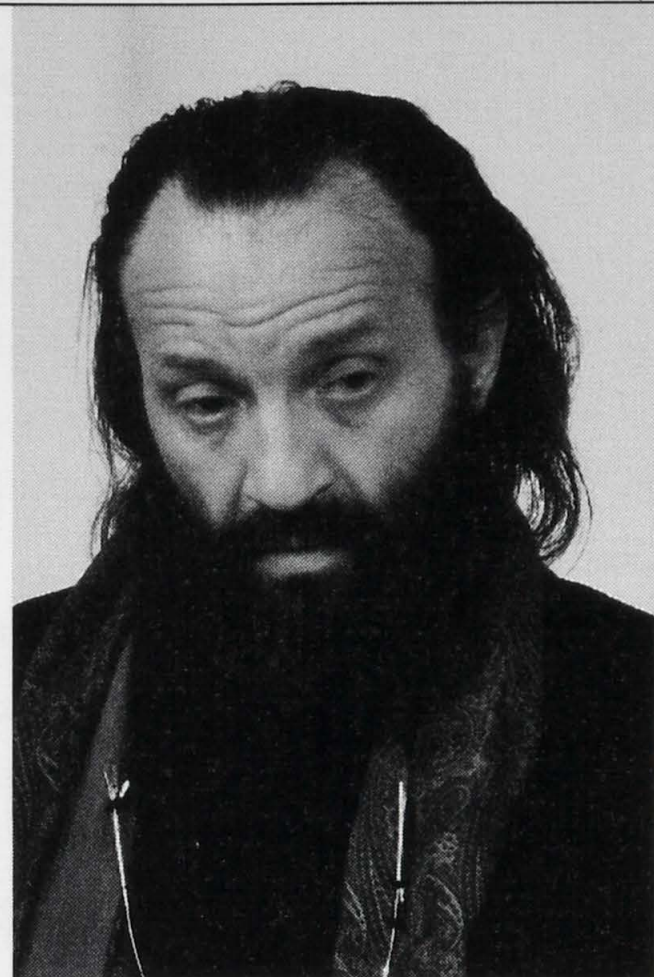
ソビエトの時代に広まり、今日まで存在している演技の理論は、とても実践的で、物質的なものである。内面について外面的な言語を用いて表現すること、たとえば建築物について話すとき、その内部を説明するのに、外部構造を正確に描写すること。この方法によって、演出家は人間の内面について語ろうとする。ソ連のほとんどの演劇は、この方法を必要としてきた。そして、私はそれを越えたものをまだ見たことがない。

しかし、建物の表面の裏側に何があるのかを語ろうとすれば、建物の中に入らなければならないと、私は思う。建物自体をみることは不必要なことであり、外部構造を描くことは不必要なことである。中に入り込むことが必要なことなのだ。その時我々は、潜在意識について語らなければならない。それは厄介なことだ。なぜならそれは人間の感覚世界に向きあい、豊かな感情をもつことを要求するからである。

外側の壁の裏側に何が存在しているのか。我々はこのことに没頭しなければならない。我々が最初の壁を覗き込み廊下を進んだとしよう。そして第二の壁も第一の壁と同じように通り抜け、さらに廊下を進み、第三の壁も同じように……。すると全く別の壁が存在している場所に到達する。我々の芸術はそこに存在しているのである。君たちはそこにぶつかるまで、似たような壁を完全に走り抜けなければならない。我々は、そこを建物と区別して、劇場と呼ぶことができる。外面とは全く類似していない構造をもつ何か。

どのように演じるべきかということを問う俳優は、それによって複雑なことを解明できると思われる、何か単純な方法に固執しているのだ。しかし私はこう言いたい、難しいものから難しいものへ。他に道はない。

アナトリー・ヴァシリエフ



Anatoli Vassiliev

アナトリー・ヴァシリエフ

1942年生まれ。1968年、モスクワのGITIS(国立演劇研究所)に入団。1970年にモスクワ芸術座に演出助手として参加し、5年間を過ごす。1977年スタニスラフスキー劇場に移る。

1979年のヴィクター・スラフキン作『成長した娘』は、演劇的な空間と時間構成の独自性により、喝采をもって迎えられ、演劇界に大きな衝撃を与えた。しかし、保守的な環境の中での創造に行き詰まりを感じ、新しい場を求めた彼は、1985年、ユーリ・リュビーモフの協力のもと、タガンカ劇場でスラフキンの『輪投げ遊び』を上演、続くヨーロッパ・ツアーで大成功を納めた。1987年、自身の劇場「スクール・オブ・ドラマティック・アート」をオープン、ここを拠点に、ピランデルロの『作者を探す六人の登場人物』、『今晚は即興劇を』などを演出。海外のフェスティバルへの参加も多く、イタリア、フランス、スペイン、カナダで演出賞等を受賞、昨年はコメディ・フランセーズに招かれ、『仮面舞踏会』を演出した。1988年、ロシア共和国スタニスラフスキー賞を受賞。また、劇場では研究所公演として、若い俳優とさまざまな共同作業を試みている。



TOGA FESTIVAL '93

●ミディアム

演出 Anne Bogart
音響 Darron L. West
衣裳 Gabriel Berry
照明 Leon Ingulsrud
演出助手・舞台監督 Kieran Jason Hackett
台本監修 Greg Gunther
制作 P. Jennifer Dana

出演 Will Bond
Mark Corkins
Kelly Maurer
Tom Nelis
Puk Scharbau

●『ミディアム』

『ミディアム』は、我々の時代の最も重要な哲学者のひとりである、マーシャル・マクルーハンのテキストと考え方に基づいている。

マーシャル・マクルーハンは、我々が現在生きている世界が、人間にどのような複雑さやストレスを強いるかを明確に示した最初の思想家である。今では誰もが知っている「地球村(グローバル・ヴィレッジ)」という言葉や「メディアは情報である」という言い方は、彼によってもたらされたものである。メディアやテクノロジーの進歩によって、感覚や精神のレベルにおいて、そして個人的な生活のレベルにおいて、人間がこうむる影響を、彼は察知したのである。

1920年代のアメリカ表現主義のスタイルによる『ミディアム』は、マーシャル・マクルーハンのヴィジョンに基づく、ダンスと演劇が一体化した作品である。それは新たな変容を遂げた、我々の精神という海原を幻視しようとする航海の旅である。シュミレーションされた現実と発達したテクノロジーとが交錯する、この新しい世界が強いる複雑なストレスの下に置かれ、俳優達は不安とヒステリーにとらわれる。一体どこで現実の世界が終わり、虚構の世界が始まるのか。想像力が果たす役割は何か。自然というものが不在となる時、一体我々に何が起こるのか。現代の生活における儀式とは何か。希望はどこにあるのか。

俳優が演じるのは、外界の急激な変化によって、異常な内面の変化にさらされた「正常な」暮らしを営む人物達である。モンタージュのように場面が積み重ねられていく中で、物語は展開していく。『ミディアム』は万華鏡のような舞台である。場面の動きは一瞬にして切り替わる。ちょうど電子機器のシグナルやピーピーという音が突然切り替わるように狂躁的かと思えば、一挙に抒情的なものへと場面は転換する。身体表現の激しさと、細部にいたるまで振付けられた様式性によって観客の心と身体に直接働きかけるイメージに満ちた70分の時間の中に、『ミディアム』のテキストがもつ思想性は凝縮される。

『ミディアム』は、サラトガ・インターナショナル・シアター・インスティテュート (SITI) 所属の劇団によって上演される。この集団は、これまでに鈴木忠志と私との訓練や上演を共有したことがある個性豊かな素晴らしい俳優達によって構成されている。ダロン・ウエストによる音響効果は様々な要素を取り込んだ、密度の高いものである。衣裳担当はガブリエル・ベリー。俳優達は、トム・ネリス、ウィル・ボンド、ケリー・マウアー、プック・シャーボー、そしてマーク・コーキンスである。

アン・ボガート

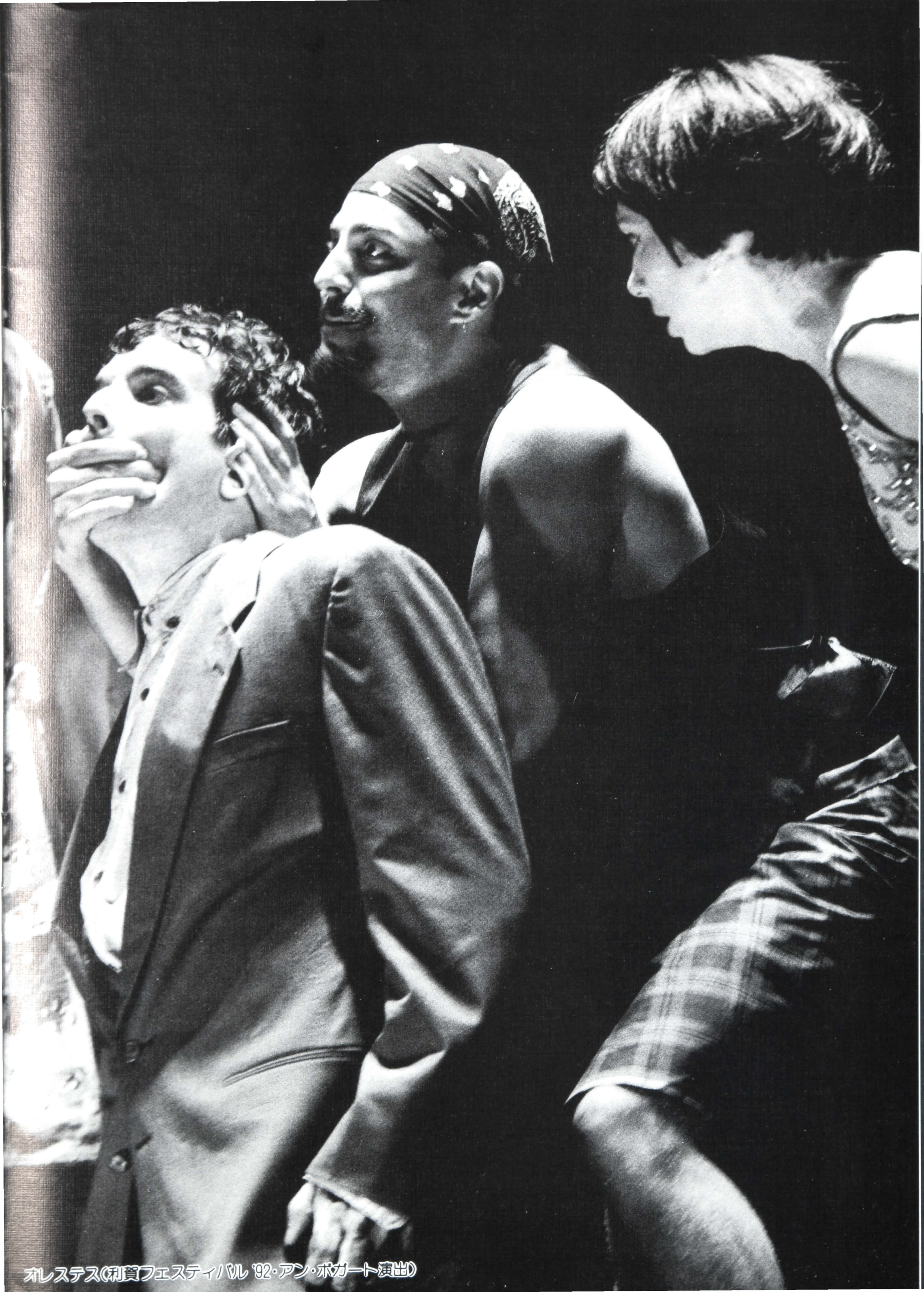


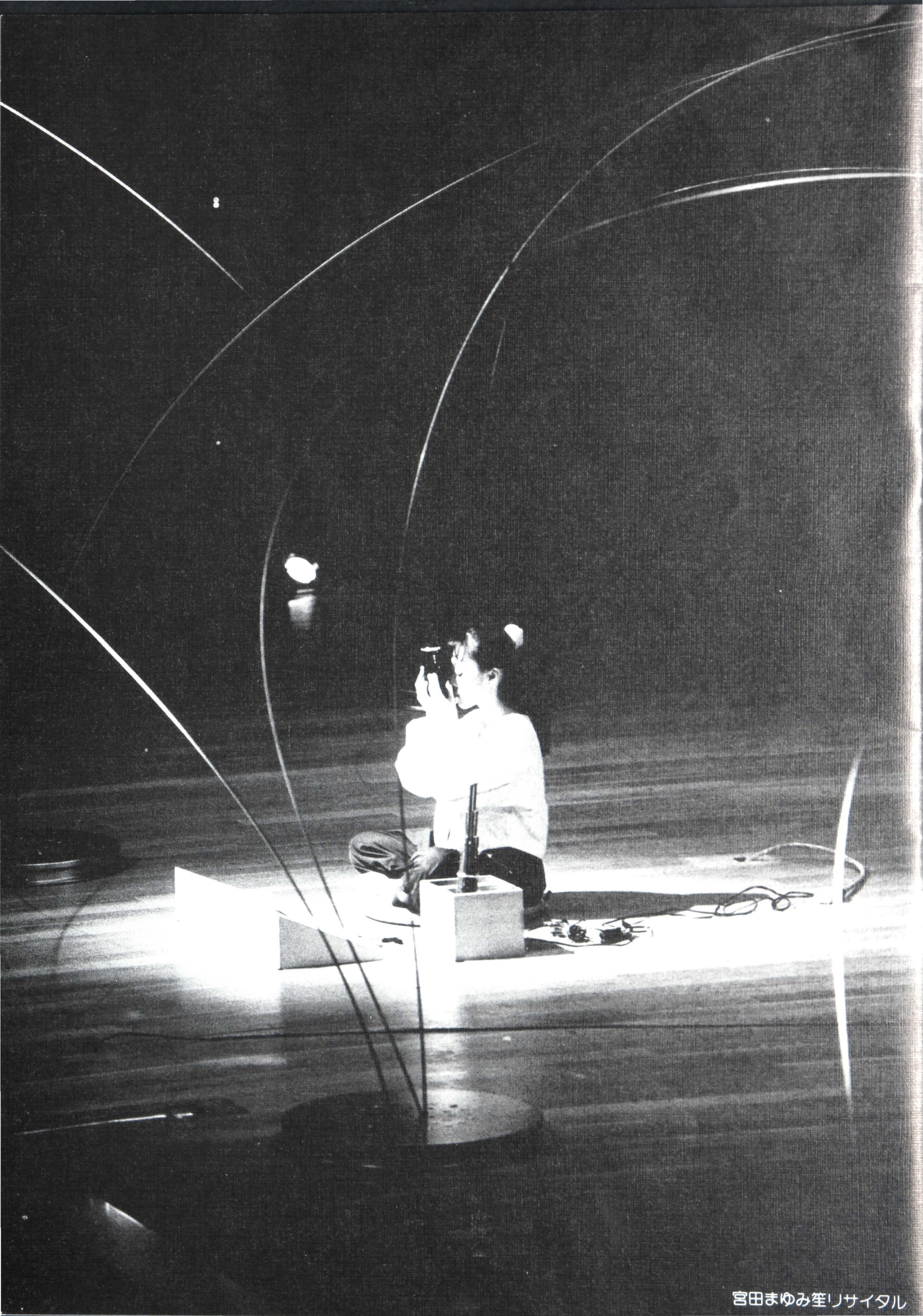
Anne Bogart

アン・ボガート

1992年、アメリカのニューヨーク州サラトガ市に設立された新しい演劇の国際組織、サラトガ・インターナショナル・シアター・インスティテュート (SITI) の芸術監督。現在アメリカで最も期待されている演出家である。代表作は、ブレヒトの作品を構成・演出した『ノー・プレイズ、ノー・ポエトリー』(1988年オビー賞受賞)、ポーラ・ヴォーゲル作の『ボルチモア・ワルツ』(1992年オビー賞受賞)。1976年以来、40本以上の作品を演出し、アメリカ、ヨーロッパで上演する一方、ポスト・モダン・ダンスのテクニック、アメリカのヴォードビルの伝統等を取り入れた独自のアクター・トレーニング法で、多くの大学で俳優教育やワークショップをおこなっている。

昨年、利賀フェスティバルでも上演された SITI の設立記念公演『オレステス』は、古典の世界に次から次へと現代の現実の事件をめぐる言説を挿入することによって、登場人物のドラマを均一化し、荒涼としたアメリカ社会の光景を鋭く描きだしたとして高く評価された。



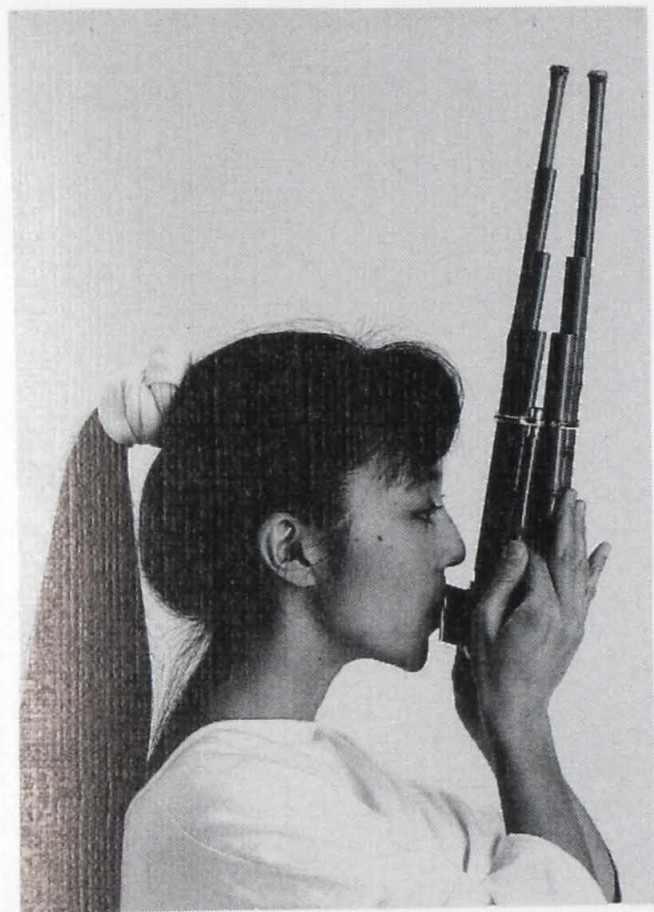




TOGA FESTIVAL '93

●宮田まゆみ笙リサイタル

笙 宮田まゆみ
打楽器 高田みどり
音楽監督 細川 俊夫



Mayumi Miyata

宮田まゆみ

国立音楽大学ピアノ専攻卒業後、雅楽を学ぶ。1979年より国立劇場の古典及び新作雅楽公演に出演。1983年より笙のリサイタルを開始。ジョン・ケージ、武満徹、ポウル・メファノ、P. Y. アルトー、一柳慧、湯浅譲二、細川俊夫等の現代作曲家による新作の世界初演を行っている。ニューヨーク、パリ、アムステルダム、シアトルなどでリサイタルを開く他、国内外の主要な現代音楽祭に招待され、演奏・公演を行っている。1993年には中島健蔵賞を受賞。

●宮田まゆみの笙

「遠近法」という、西洋の近代絵画での手法がある。あたかも目に見えるように、一つの中心点から、遠いものは小さく、近いものは大きく描かれる。音楽にも、遠近法があるだろう。遠い世界はピアノッシモで、近い世界はフォルテによって発音されることによって、音楽はその空間性を感じさせる。

宮田まゆみの笙を聴いたとき、人は聴いている自分と、奏している彼女との距離を失ってしまう。笙というのは、不思議な楽器で、空間に充満してしまうと同時に、その響きがどこから生れてくるのかわからなくなる。遠近法が消えてしまうのだ。笙の響きに永遠を感じるのは、人が日常で習慣的に感得している空間性が断ち切られてしまい、その響きの生れる場所が、西洋の楽器のように一つの点からではなく、見えない幾つかの点から響いてくることから生れるのだろう。日常の感覚の裂け目から響いてくるもう一つの声。

吐く息、吸う息による螺旋運動がその魅惑的な持続音響を生み出す。波が満ち、また引いていくように、その響きは空間を少しずつ満たし、いつしか私たちは、その響きの渦の中に溶け込んでいく。

宮田まゆみの出現によって、「笙」という長い間大切に保存され、博物館的な存在になってしまっていた雅楽の楽器が、千年にも渡る永い眠りから目を覚ました。その目覚めがこんなにも荒涼とした20世紀の終わりであったことは、笙にとって幸福なことだったろうか。20世紀終わりの、笙のための音楽。それは単にエキゾティシズムや優雅さだけでは表現できない音楽であった。

笙のためにもっとも優れた作品を書いたのは、宮田まゆみと出会った現代の最も先鋭的な作曲家たちだった。ジョン・ケージ、武満徹、ポウル・メファノといった音の詩人たちが、彼女が、優しく接吻するように吹奏する笙の美しさに感動して、新しい音楽を書いた。現代に生きるものの魂の傷を負ったその新しい音楽を、宮田まゆみは、遠くに光が明滅するような、深い静けさを秘めた音楽に、昇華させていった。

細川俊夫

- 1 盤渉調調子（ばんしきちょうのちょうし） 雅楽古典
- 2 変礙の楽（へんげのがく） 作曲 高田みどり
- 3 双調調子（そうじょうのちょうし） 雅楽古典
- 4 TWO³ 作曲 John Cage
- 5 Soleil Noir 作曲 Pierre=Yves Artaud
- 6 鳥たちへの断章II 作曲 細川俊夫



Midori Takada

高田みどり

東京芸術大学音楽学部卒業。1977年、ミュンヘン国際音楽コンクール打楽器部門入賞、バンムジーク音楽祭「現代演奏コンクール」マリンバ部門入賞。1978年、ベルリン・ラジオシンフォニーのソリストとしてデビュー。1981年、ミニマル・ミュージック、アフリカ音楽などのリズムの在り方を再構成して演奏する「ムクワジュ・アンサンブル」を組織。高度なテクニックを駆使しての現代曲はもとより、ジャンルにとらわれない広範な活動で注目を集めている。



TOGA FESTIVAL '93

●協賛

富山県
富山県教育委員会
利賀村
日米友好基金
フランス芸術文化活動協会
ブリティッシュ・カウンシル
ポーランド文化省
松翁記念財団
全日空
草月会
三井広報委員会
西友
丸茂電機
ユニオン エアー サービス
電通関西支社
コーク・ステップ・ホール
トナミ運輸
若鶴酒造
日本海ガス
富山第一銀行
富士物産
ヨシダ印刷
中越興業
米澤工業
米澤生コンクリート
城岸組
野原建設

●写真協力

湯浅正弘
宮内 勝
青木 司
安斎重男
古館克明
鈴木 収
Claude Danten
Laurent Philippe
Pierre Fabris
Bernd Uhlig
A. Bezukladnikov
Clemens Kalischer

●財団法人国際舞台芸術研究所

利賀事務所
〒939-25 富山県東砺波郡利賀村上百瀬
TEL: 0763-68-2356
東京事務所
〒169 東京都新宿区高田馬場1-20-10-103
TEL: 03-3202-2170

●THE JAPAN PERFORMING ARTS CENTER


Toga Office
Kami-momose Toga-mura
Higashi-Tonamigun Toyama
TEL: 0763-68-2356
Tokyo Office
1-20-10-103 Takadanobaba Shinjuku-ku
Tokyo
TEL: 03-3202-2170



感動は、いつも光の中。

—STAGE LIGHTING SYSTEM—

MARUMO ELECTRIC CO., LTD.

 丸茂電機株式会社

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03-3252-0321 営業所／大阪・名古屋・福岡・広島・札幌・仙台